



Title	レッシングの諦念について : レッシング研究序
Author(s)	葉賀, 明
Citation	大阪外国語大学学報. 1965, 15, p. 23-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80240
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

レッシングの諦念について

— レッシング 研究 序 —

— Der Weg von der Innigkeit zur Große geht durch das Opfer.

— R. Kassner.

葉 賀 明

Lessings Entsagung.

Der Mensch ist Logos in sich. Er ist Logos und ohne ihn hört er auf, Mensch zu sein. Hier heißt Logos, im ureigentlichen Sinne, Gegensätzlichkeit. Diese wiederum wird dem Pathos gleichgesetzt, das danach strebt, sie zu überwinden. Das ist Lessings Grundidee.

Folglich ist in Lessing der Mensch fast dem Pathos gleichgesetzt und folglich sind auch alle seine Gegenstände subjektiviert. Und dieses Pathos wird auf zweierlei Weise betrachtet, einmal als Tendenz zur Welt und einmal als Bescheidung auf sich selbst. Seine Welt ist durch die Kraft solcher Entsagung tendenziös und will sich immer so elastisch wie sein Leben ausdehnen. Seine Entsagung dagegen nimmt an ihrer Spannung immer mehr zu, bis zuletzt einmal diese Entsagung mit ihrer höchsten Kraft sich in das "reine Wort" kristallisiert und bis zugleich seine Welt zum allgemeinen System der „reinen Vernunft“ sich vervollkommen soll-einmal, wenn auch in unendlicher Ferne.

Lessing war ein echter Dichter, der in das Wort vertraute.

Ephraim G. Lessingは 1729年 Sachsen の小村 Kamenz に Luther 派の貧しい牧師を父に5人兄弟の長子として生れた。それは Leibniz の死後約10年である。そしてBraunschweig に於て恐ろしい孤独の内に、一部の人々には „vom Teufel geholt” (悪魔に連れていかれた) と云われつつ、彼の斗士としての一生を終えたのは1781年。Goetheの „Werther” 発表後7年、まさに、„Sturm und Drang“ の逆巻く時であった。

即ち彼の生涯は所謂 ”啓蒙期„ に属する。

そして人は彼 Lessing を結局、理性に仕えたドイツ啓蒙期の大立物とし、次代のGoethe, Schiller の Genie-Zeit 開幕への開拓者と見る。

が果してそれだけだろうか。成る程 Lessing によって文学に於ける合理主義が覆滅させられ感情爆発の Genie-Zeit への途が開かれたとしても、それは Lessing の志向する遙かな大道の云わば派生小路ではなかったろうか。(しかし後年この派生小路が „イタリー” を通って行き着く筈のものは今の我々の問題ではない)。

それはそれ程に Lessing の生きた時代即ち GenieZeit 前夜が余りにも暗く、頑迷な合理主義の重圧の下に感情、生があえいでいた結果の若い人々の反動ではなかったろうか。„Werther”が発表された時、彼はその価値を認めつつも、苦い顔をしたと云われる。これを以て人は Lessing の限界と見做す。果してそうだろうか。

Gottsched, Voltaire を代表とする詩文に於ける合理主義が覆滅せねばならなかったのは、Klopstock, Bodmer, Wieland 等の感情からでもなく、感覚からでもない。無論これらの精神力の再生が、その覆滅を促進したにしても。

それには合理主義自身の内からの爆破、合理主義それ自身の手段、その 拠り所であった所の „理性” そのものが再び生きたものとなり、再び体験となり、体験によって養われねばならなかったのだ。Aristoteles 以来の創作上の法則を、又 Bibel を、硬化した法典としてでなく生きたものの成果へと還元し、現在の生によって養われねばならなかったのだ。

この理性を、生きたものの成果として究問するという課題—これは中心からすべての分野に浸透せねばならなかった。この殊の外困難な持久を要する仕事を文学に於て最初に引受けたのが Lessing であった。

つまり彼 Lessing は中世後期より起った „Zurück zur Quelle” をモットーとする人文主義運動の流れを汲む者であり、而も彼の如き人物が文学に於て、他の仏英等に比して斯くも遅く現れねばならなかったのはドイツに於ける一大人文主義者の一人であった Luther の責任である、一と云うより Luther に対する後世の誤解に罪がある。又 Luther 以後のドイツ文化が神学—

色に塗りつぶされ、当時ドイツが文化的にも、恰も近代ヨーロッパに於ける中世的離れ島の観を呈していたのも Luther の責というより後世のその誤解によるものなのだ。

この誤解された Luther に対決することは Lessing の如き使命をもった詩人の仕事として、決して偶然的な副次的なものではなかったのである。例えば彼の後期の宗教論争文も彼の偉大な文学上の作品と見做されねばならない所に彼の詩人として一つの大きな特質がある。問題はその外題ではなく、その対し方である。

„文字が精神なのではない、そして聖書が宗教なのではない”と云う、このような態度が彼の対し方であり Luther に就て次の如くに云うのである。

„偉大なる誤解されたる男よ！貴方は我々から伝統と云うくびきを取り除いてくれた、が、今我々から „Buchstabe ”(文字) というこの堪えられようもないくびきを取除いてくれるのは誰であろう。今、現在貴方が現れたら教えてくれるであろうようなキリスト教を、否、キリスト自身が現れたら教えてくれるであろうようなキリスト教を、誰が我々にもたらしめてくれるであろうか！”

つまり Lessing は Luther の誤解の原因たる彼の内なる矛盾即ち „die Innerlichkeit der Seele”と„die äußere Autorität der Bibel.”の並存緊張を看破した人であり、むしろそこに人間存在の在り方の根元を探ろうとするのである。この様に彼の目は社会の凡ゆる事象にそそがれ、而もこれに躊躇して考えただけでなく、究極に至るまで考え、それらを人間存在の在り方という根元的なものに還元しようとするのであって、そのような彼の態度の代表的な一例として Aristoteles 解釈があげられよう。劇論で彼は次のようなことを云うのである。「Aristoteles の文中で一つの矛盾に出合う時でも、私には恐らくそうでないように思われるのだ。Aristoteles 程の人が易々と明らかな矛盾をおかすとは思えない、こんな場合には私はその人の悟性によりも、自分の悟性に不信を抱く。そして注意を倍加して何度も何度も読み返す、そして彼の体系の全体のつながりから彼がこんな矛盾に導かれたのは、どうしてなのか、何によってなのか、が分る迄は彼が矛盾したのだとは思えないのだ。しかし、どうしてもそれが分らない時、私はその矛盾は単にみかけだけのものに過ぎないと確信するのだ。なぜなら経験浅い読者である僕に分る程の矛盾が作者に分らない筈はないのだ。こうして私は立止り、彼の思想の糸を逆に辿り、一語一語を吟味し、そして常に自分にこう云いきかせるのだ—Aristoteles も間違ふ事はある、実際しばしば間違った事だろう。が彼はある事を云ってすぐ次の頁でその逆の事を云う筈だったんだが、それをしない場合もあるのだ、が、最後になって分るのだ、と。……Aristoteles は彼自身の心の中から解明される事を慫ずるのだ。例えば彼の詩学を解明せんとするものは、まず何よりも彼の作品を始めから終りまで読まなければならない、その人は思いもよらない所に詩学解明の

鍵を発見することだろう。特に „Rhetorik” と „Moral”, とを研究しなければならない”。

即ち彼は Aristoteles の厳密な学問体系を通じて体系そのものでないその背後に潜む Aristoteles の人間そのものと対決するのである。Aristoteles が自己の心中を外へ表明せんとする場合、相対立する相矛盾する二つの命題を同時に並置すると云う表現方法しか出来ない。そしてその対立の中から、その対立の中に落ちてくるものを人に感得させるより外にない。と云う彼の人間的な苦悩—この世での人間の在り方, „対立性” に対決するのだ。そしてこの自身の内の, 対立性に苦しむその苦悩の中に Lessing 自身を, 否, 普遍的な人間性を, 最早や, Aristoteles 個人でない普遍的な人間性を発見するのだ。斯くして „人間は Logos を持つ動物” と云う Aristoteles の言葉は, 彼 Lessing にあっては, „人間は, 一自分は一対立そのものだ” と体得されるのだ。(因みに Euklid の „Elemente” 中の第五章には „Logos” と表題が付いて, 重要な章とされているが, そこには, „比” „比例” のことが, 問題とされているのだ。即ち Logos とは „比” つまり „対立” を意味する言葉だったと考えられるものだ。) 所で „対立” とは必然的に, その対立関係を無くしようという慾望, 而も無くせんとして無くし得ないという悩みを内に潜めるものである。一だってこれなくしては既に対立の意味はなさなくなるではないか。 „人間とは Logos を持つ動物だ” とは深く人間性の諦念に目覚めた言葉であり, „理性” と云い „言葉” というものは畢竟 Logos であり, つまり, „対立性” „人間のこの世での在り方としての諦念” そのものであると云うことを身を以て実証した人が Lessing なのだ。 „理性を体験とし体験によって養う” とは, つまり, 理性とは無味乾燥なものでなく, 人間そのものの内に熱い情熱を秘めるものだとの謂だ。

„人間の価値を作るのは, その人間の所有している, 又は, と思っている真理によるのではなく真理の背後に迫ろうとするその人の誠実な努力に依るのだ。もしも神が右手に真理を, 左手には真理への一筋な倦くなく努力—をしっかりと握って, 私にどちらが慾しいか選べと仰云ったら私は心を低くして神の左手にすがって私は云うだろう, 父よこちらを下さい, 絶体の真理は, だって父一人だけのものですもの, と。譬えそれには, しょっちゅう踏み迷うという附加条件がついておろうとも私はそう云うだろう, ” と云う Duplik の有名な一節は „人間は Logos そのものだ” と云う彼の認識を彼流に表明したものに外ならぬ。そしてこのような Pathos が彼の総ての言葉, 総ての著作の底に流れているのであって, これに彼の総ての言動は収斂するのだ。彼の言葉は, 凡て, 背後に彼の全精力を潜めた重い言葉なのだ。

そしてこの様な Pathos の坩堝の中では真理そのものが殆んど, それへの彼の努力に等置されている, 真理が主体化されている。彼の対決する対象, Aristoteles にしろ Luther にしろ,

Shakespeareにしろ、総て知らず知らず彼自身の性格を帯びてくる。世界が主体化されている。

Lessingの文字を解明しようとする場合、我々は先ず彼の全著作を読まねばならぬ。彼は彼自身の心の中から解明されることを慫慂するのだ。„作家の作品を読むは、その作家の生を生きるより容易だとは誰が云いきれよう”と云った人があったが、誰よりもこの Lessing に当てはまる所に、又、彼の文学の一大特質がある。彼の言葉が理性的だと云われるのは、„言葉”というものの本来的な意味に於て、根元的だという意味なのだ。„言葉”と云うものに対する対し方がより根元的だという意味だ。ここで少し方向を変えよう。

„見解の相違の為、非真理であらうとこれをを誠実に、慎しみ深くも鋭く完遂しようとする人は、例え絶体最高の真理でも、偏見で以て相手を罵りながら在り来りの方法で弁護する人よりどり程価値があるか知れない”という Duplik の一節を読む時、Lessingの厳密な言葉、普遍を期すような彼の思想と思い合わせて、僕には„数学”の方法一同じ空間を対象にしながら Euklid の体系の他に幾つかの非 Euklid体系の存在を許す数学の方法との親近性が考えられてならないのだ。

生成期に於ける Lessing は前代の文学より寧ろ Deskartes, Pascal, 特に Spinoza, Leibniz 等の哲学者、神学者からの方が遙かに多くの養分を吸んだことはよく指摘される所だが、これらの人が同時に超一流の数学者であったということは、Lessing を考える場合特に注目に価いと思うのだ。

„文学と数学” —それは一見相容れない両極端に見える一特に東洋文化の雰囲気の中で育った我々には。我々が西洋文化を深く理解する際、ギリシャに溯らねばならぬとよく云われるが、少くともギリシャ文化の根幹をなしたと云われる所の — Platon の Akademia の入口には „幾何学を知らざる者入るべからず” とあったと云われる — 数学を過少評価しないことは、少くとも Lessing の精神に立向う場合無駄ではないと僕には思えるのだ。

事実彼の少年時代学んだ Meissen の侯立校では一以来、語学に重点が置かれている学校なのであったが、此所で彼は仏、伊語の外に特に数学者 Klemm の下で数学、自然科学の根本的な指導を受けたのであり、つづく Leibzig 大学では彼は神学科の学生であったにもかかわらず、数学者 Abraham Kästen の講義に熱烈な関心を以て出席したのである。

一が、此等倦くまで、哲学者であり、数学者であった Spinoza, Leibniz から詩人 Lessing が何を学ばねばならなかったのか。 — これら全く相対立する存在から却って一層深い近親性、対立が厳しければ厳しいだけ、それだけ根元的な統一を発見しそこから新しい創作の方法をつかんでくる所に、詩人 Lessing の本領があり、そこに彼の文学観が生れるのである。普通、生とか感情とかいわれるものの横溢した文学作品と比較すれば、彼の作品はいささか異様に見えるかも

知れぬが、彼によって起ったドイツ国民文学の伝統は形を変え姿を変え、常にドイツ文学の底流となっているのだ。近代ドイツ文学の中には、神、人生、人間内部の矛盾といった人間存在の根元へしつような迄に迫る態度が見られるのである。

楮、生成期に於ける Lessing が当時の文学からよりも哲学神学から、遙かに多くその養分を吸い取ったということは、彼の水々しい生命の本能が、自分の置かれた環境の中で何処に自己の栄養が潜んでいるかを鋭敏に嗅ぎわけたのかも知れない。当時枯渇してゐたドイツ文芸が若し再び水々しく蘇り花咲くとしたら、その胚種養分はこの Leibniz や Spinoza の精神の中にこそあったのである。人は大ざっぱにこの時代を合理主義時代と名付けるが、それと共に僕らは彼らの合理主義というものの自己の背後に抑制した深い人間的な苦悩を思はねばならぬと思う。

彼は当時の誰れよりもこの水々しい自由な生命力の持主であったのであり、この生命力の水々しさ、自由さにして始めて、相両極するものからそれだけ深い統一を汲みとることが出来たのである。自己分裂がきびしければきびしいだけ、それだけ一層全き人間性を、この世の重荷が重ければ重いだけそれだけ深い神の愛を信じようとする健康さである。

„自分は一匹の人間だ、泣きもすれば笑いもする” (Philotas) とか、“書物は成る程自分に教養をつけてはくれるが決して一人の人間にはしない ” (Der junge Gelehrte) といった彼の作中人物のさりげないセリフの中にも、当時の頑迷な文学界に彼する彼の豊かな生命力の挑戦が見られるのだ。

又彼が二十才で大学を出ると、健実な地位に至る正規の途を自ら棄て、当時としては兎も角新興の生氣に満ちていた新興国プロシアの首都 Berlin に出るのだ。金もなく、縁故もなく、両親にも背いても、全くの自由な作家としての生涯に入るのだ。かかる選択が当時、いかなる勇気が必要だったかは同時代の人々の例を見れば悟る。確かに、この都市の生氣が多くの青年たちを文学の世界に投げこんだ。がそれらは中年になるとこの世界を棄て、確実な社会的地位に大抵は教職宮廷に救いを求めているのだ。Lessing だけは自分の内的な職分に専心することを妨げるような一切の職には就かなかった。„世間では、文学なんてものは、無用なことではないにしても、所詮玩具の如きもので、せいぜい二十五六才にもなれば教会とか、国家の要求する仕事に就くべきだ。というのが一般だ。だからこそ我国の文学には心髄、骨がないのだ”。と劇論の中で云っているが、之は、文学が、ひいては言葉というものが、人間の根元的な存在と如何なる連りを持っているかという彼の確信から出た挑戦なのだ。

が、後年彼の三十一才の時、彼の劇作関係の仕事の失敗で多大の借財を背負った時、

„人間は三十にもなれば、頭だけでなく財布の中も一杯にしなければならぬ”

と云う言葉を残して、ある友人の推薦して呉れたあるプロシア将校の秘書という官職について Breslau に赴くのである。

これは矛盾だろうか？僕にはそうは思えぬ。いや之でこそ抽象的でない現実の大地に足をつけ

た „泣きもすれば笑いもする” 一人の人間ではないか。この彼の言葉には彼一流の „おどけ” が
見られるかも知れぬが、その底に人間性に対する彼の深い諦念がかくされているのだ。このこと
は彼の „Berengarius Turonensis” 中の次の言葉によって一層明瞭になろう。

„生命の危険に際して、真理に不実になったとしても、それでも、その人は大いに真理を愛す
ことが出来るのだ。そして彼のその愛の為に、真理の女神は彼の不実を許すのだ”。

この言葉でも悟るように、僕のいう „諦念” とは東洋的な „アキラメ” の意味でいっているの
ではない。極めて健康的なものなのだ。健康性とは、一度も病気をしないということではなく、
たとえ病気をしても、その度に又回復し得る能力をいうのだ。諦念とは健康な生命力以外の何物
でもないのだ。

それは „自分は知らないってことを知っている” という Sokrates の逆説の形であり、それ
は Spinoza の人間本来の情熱を内に秘めた静かな理性の謂なのだ。

ともあれ „私は一匹の人間だ、笑いもすれば泣きもする” という一見何の変哲もなさそうに見え
る彼の言葉も実は、深い彼の人間洞察の果の諦念に満ちた言葉なのであり、言はば彼 Lessing の
全体重がその背後にかかっている所の重い言葉なのだ。Lessing は彼自身の心の中から解明され
ることを慫すとは、この意味なのだ。この意味で彼の凡ての言葉は内奥に於て連関しているのだ。

所で劇論で彼は次の如きことを言っている。

„自然の中では、凡ては互いに結び合っている、凡ては互に交錯し合い、変遷し合う。がこの
多様性のままだと、それは無限の精神の為だけの劇だ。有限の精神にその享受に与らせんため
には、それに杵を、実際にはそれのない杵を与え得る能力を持たねばならぬ。区別し排除し真摯
な善意によって、その現象を導き得るような能力を。この能力を我々は生活の凡ゆる瞬間に行使
する。これなくしては、我々にとって人生は全然存在しないと同じだ。芸術の使命は美の国に於
て、この区別をこの杵を取り除けてくれ、浄化してくれることだ。”

僕はこの言葉を楔機に、下に一つの考察を試みたい。

Spinoza に見られる深い諦念に満ちた静かさ、Leibniz の連続律の厳しさ。 „Akademie
für sich” と云われたあの Leibniz でさえ „刊行されたものによってのみ私を知るものは私を知
らないものである” —と云わねばならなかった苦しさ。

Euklid 体系も、それが厳密堅牢であればあるだけ、Euklid の諦念は深かったのである。
Euklid 体系は彼の世界解釈である。彼の Wahrheitspathos の結晶である、彼の „創作” で
ある。元々、ある一つの命題から次々に演繹してそして万有を我が物としたい、(万有を奥の奥
で統べているもの) そのような命題を追求したのだと解釈出来る。が彼にはそのような唯一つの

命題は発見出来なかった。真理が発見出来なかったのだ。止むなく彼が最初に、互いに独立な、而も相矛盾しない数箇の „仮設” を設けなければならなかったということは容易ではなかったろうと思われるのだ。と云うことは彼は自己のぎりぎりの真理愛で以て、あいまいなもの、相矛盾するものを極度に排除し、その仮説の下に圧え込んだのだ。これ以上は悟らないという所で一線を引いたのだ。即ち彼の „知らないということを知っている” という表明なのだ。逆に云えば、この一線の世界そのものには存在しないのだ、が、敢えてそれ以下を押し込んで自己の世界を打樹てたのだ。彼の真理愛から敢えて真理に不実になったのだ。そしてこの諦念の強さが彼の体系全体を恰も発条のように論理的厳密として緊張させているのだ。◦諦念◦とは彼の追求のPathosの裏がえしの溜り場だ。要するに人間がその対象を我物とせんとする場合必然的にこのような一線を枠を設けねばならぬという事だ。

Lessing の言葉の厳密さは、あいまいさを極度に排し、普遍への厳密さを求めようとするもので従ってその裏側には彼自身の生の情熱が圧へられ溜められてあるのだ。厳しければ厳しいだけ、読者に熱を帯びさせるのだ。が彼の対象である世界は Euklid のそれが自然界であったのに対し倦くまで人間世界、自分自身その 1 人である人間世界だったのだ。従って彼の ◦諦念◦は Euklid の如く ◦仮に設ける◦では済まされなかった、言はば自分の生命をそれに賭けたものでなければならなかったのだ。これが先に挙げた Duplik 中の自己の真理愛表明の言葉の意味だ。そして彼のこのような諦念の上に彼の体系があった。が彼は之を書いたことはなかった。——自故なら、それは常に追求の途上にある彼にあっては常に弾力をもって動くものだからだ、一瞥へてみれば張り切った風船の上に立つ空間の様に。或ひは又、地中に根を張って、天まで高く昇ろうとする若々しい樹木のように。

◦諦念◦と ◦体系◦は Lessing の真理追求のパストの否 Lessing という、この世界に生きる人間そのものの、それぞれ裡と表だ。——この ◦体系◦を人は ◦理性◦と呼ぶ。理性にはその背後に ◦諦念◦という Pathos がかくされている。而して彼の体系は常に極度に普遍的たらんとするものであり、厳密たらんとするものである。そしてこの成長を阻害するものは彼の生命の全重量でもって、これに当るのだ。そしてここに排除され、区別されたものを自己の諦念の中へと送り込む。こうして諦念の云はば圧力は増し体系は伸びるのだ。◦一体系◦は諦念の圧力による ◦tendenziös◦なもので、常に弾力的に膨張しつつある。

(所でかかる意味の ◦諦念◦が極度に押しつめられたその極限に於て、叫びとして音声化されたものが ◦言葉◦の始源の形であったであろう。Logos とは対立の謂であった。一自己と世界との対立—そこに当然、その対立を消去せんとする識らうとする pathos が生れる。つまり諦念

が生ずる—そしてその反対側に理性が—因みに理性は必然的に普遍性を目ざす「体系」の形をとる。Logos が理性とも言葉とも謂れる所謂だろう。)

次は劇論終来の一節である。

「私は俳優でもないし、詩人でもない。実際人は時々名誉にも私を詩人だと考へてくれる。がそれは間違っている。筆を握って絵具を塗りたくる人なら誰でも画家というわけのものではない。最近私がものした中で、どうにかこうにかと思はれるものも、実は、唯々それを私は批評に負っているのだ。私は自分の内に自らの力で新しい豊かな光となって噴出する生きた泉を見出さない。私は凡てのものをポンプや水道によって汲み出さねばならないのだ。若しも私が他人の宝を心を底うして借して貰い、他人の焚火で身を温め、人工の眼鏡で視力を強めることを学ばなかったなら私はすごく貧しく冷く、近視であったことだろう。だから「批評」というものの悪口を読んだり、聞いたりすると何時も私は我が身が恥しくなったり又は嫌になったりしたものだ。批評は天才を締め殺すと云う、でも私は天才に非常に近いものを批評から得られると自負しているのだ。私は跛足だ、たとへば松葉杖を人が悪魔にしてもそれなくしては歩くことの出来ない跛足なのだ。」

此所にある彼は全く先の Duplik の中の彼と同じではないか。

「私は天才になり得ない唯一途批評するのみ。」

此処で「批評」とは「体系」の作用の謂で、即ち普遍的たらんとする意欲に悖るものを区別し排除すること、自己の体系に照らして非難することだ。と同時に新たなものを獲得し自己を新にするのだ—新たな「体系」と諦念の自己になるのだ。どんなつまらぬ者でも自分と同一でないものは、自分の持っていないものを持っている、というのが彼の考へだ。Duplik で次のようなことを云っている。「20度打ちのめされた者でも、それでも何時かは勝利の手助けをすることは出来るのだ。」

さて劇論の文に帰へるがそこでは、「謙遜」と「自負」、「誇」が並存しているのが感じられるだろう。

「Kritik の悪口を聞いたり読んだりすると私は恥かしく思ったり、又は (Oder) 嫌な気になる。」

これは Kritik とは自己の「体系」に照らして裁くことであって、その「体系」は、Lessing にあっては、「諦念」と共に自己自身の表裏だからだ。即ち自己を振り返る時自己は即ち「諦念」であり外に向けば、それは即ち自己は厳密な理性、体系だからだ。云い換へれば Kritik の悪口とは自己自身へのそれと等価のものであり、その自己は「諦念」を持つという点では恥かしいが生命に賭けて敢然と世界に立ち向っている「体系」にとっては嫌な気がするのだ。

このような謙遜と誇りの並存緊張が彼の文体の大きな特長の一つで彼の文が逆説めくのもこの為で、そこに彼の息づかいを聞くのだ。

跛足の比喩も又それであり又、

「批評は天才を殺すと云はれているが、私は批評によって、天才に非常に近いものが得られると自負している。」

というものもそれだ。所で—

Leibniz の連続律では、例へば無理数 π を表わすのに、それに収斂する有理列を以てするのだ。

例へば、3, 3.1, 3.145, 3.1459……

これは個々の数だけを取り上げれば（限りなく π に近づくかも知れないが）何処まで行っても π ではない有理数だ。が我々はその個々の数でなく、その列を見る時そこに無理数 π が生れてくるのだ。それでも個々の数自体は有理数であって無理数 π ではない。一問題は個々の数でなく、それらの列だ運動だ。

——この Leibniz の思想と Lessing の真理愛の思想やこの劇論終末の文意と無関係だといへるだろうか？そして悲劇に関する Lessing の Aristoteles 解釈である「浄化作用」の思想も究局的にはこれである。

（ここで Leibniz の連続律の思想は Aristoteles の詩学と関係があると考へるのは早計だろうか？）

彼の真理追求の思想に見る如く、世界の対象に立ち向うとき、彼はその対象そのものを、自己のそれへの追求の Pathos と化してしまうのだ。—「真理」そのものを自己のそれへの努力と等価 gleichsetzen するように。換言すれば自己の体系の中に組入れられて了うのだ。—無論この体系は彼の追求の Pathos によって「諦念」の一線が弾力的に働くが如くに動いている……。そして他方、他人は無論この自分とは又違った評価をその対象に持っている。これは自己の生命を賭けた体系に対する挑戦ではないか！これは自己の生命の生長力への挑戦なのだ。

そして罫を押すが、彼の体系は普遍を求めるものであった、強制的な明確さを求めるものであった。従ってこの戦いは普遍の場に於て一致せんが為だったのだ。次の彼の Wie die Alten den Tedgebildet 中の文も彼の真理追求の思想から出るものだ。

「私はこれからの論をその動機によって評価してもらいたくないもんだ。その動機たるや誠に軽蔑すべきもので、唯私がそれをどのように利用したかという事だけがその弁解になる底のものだ。又私は諸君が所謂論争文にもういい加減嫌気がさしているだろうことを思はない訳ではな

い。が、しかし諸君は幾多の重要な点の解明は実に「単なる反論」に負っているということを、この世に於ては人間達は何事についても喧嘩をしなければ、それについて一致する事は出来ないのだということを忘れようとしているのではあるまいか。

「対立」の中にこそ、斗争の中にこそ、自己存在の在り方がある、この悲痛な諦念の上で彼は常にこの社会に対立を求め論争を繰り返すのである。彼の思想は凡てこの生々しい対立の中できびしい斗争の中で思考され自己の体系の中に組入れられるのであり、従って彼の発言は常に現実的に対外的に生きたものであって、決して抽象ではなかった。彼は極めて孤独な人間であると同時に極めて社会的な精神であった。彼の発言は常に時機を得たものであったし、又どんなつまらない動機又どんな些少な人間に対しても彼の全精力を賭けて戦った。彼は「事の軽重は相対的なもので小さい事柄だからと云って等閑に付すような人は真理を愛する人とは認めない」と *Wie die Alten den Tod gebildet* の中で云っているのは彼の体系が普遍を命がきり求める *Pathos* の裏づけがあるからだ。

彼は斗争の中で斗争を通して養分を吸いとり成長してゆく、そして次々と体系を完成して行く、それに付れ裏の諦念—アイマイなもの、矛盾が押し込められてあるもの—は益々押え込まれ圧力を益す。そして *Lessing* はそんな普遍の体系の完成の日がいつの日かやって来ることを信ずるのである。—そしてそんな完成の瞬間、裏の諦念は極度の圧力のため爆発して一声の叫びとなる。—之が人間の始源の言葉であり、そしてそれは人類誕生の日でもあった。—之が *Lessing* の来世輪廻の思想だ。そして之は、「対象を、それへの *Pathos* に等置する」ということの意味なのだ。「永遠の今」だ。

ともあれ *Goethe* の「自然の論理化」とか *Novalis* の「数学は神の論理」という思想も *Lessing* のこの思想と一脈通ずるものがあらう。

だがしかし。そんな普遍の体系の完成日は今は未だだ。今の人類の段階では未だし。ただ我々はその日の来るを信じて努力するだけで、それが人類の務であり神の意志なのだ。それも決して、漸進的に来るとは限らない。後退するかに見える時もある。*Lessing* の諦念の一線は、*Euklid* の「公理」という名の諦念が固定されたものであるに対し、常に健康な生命力そのものように極めて強く弾力的に動く。—これが文学と数学の決定的な区別でもある。—彼の発言の裏には体系があった、が彼は之を一度も書き下しはしなかった。否書くことが出来なかった所に彼の詩人性があるといえるのだ。

「真理の為には幸も生命も犠牲にする、というのが義務であるかどうか私は知らない。少くと

もそれに必要な勇気と決断力は我々が自分に与へることの出来ないものである。だが真理を伝えんとするものは、それを『金き形』で伝えるのでなければ全然伝えないということは義務だと私は心得ている。……生命の危険に陥入った時、その為に真理に不実になったとしても、それでもその人は大いに真理を愛することは出来る。そして真理の女は彼の愛の為に彼の不実を赦すのだ。〃僕は、この Lessing の言葉の解明のためにこの小文を費した。そして宗教論争という形の中にも、『言葉への信頼者』としての詩人 Lessing を見るのである。

彼の一生は論争の一生であった。しかしそれは言葉の信頼に於て、言葉による自己実現、自己普遍化の途であったのだ。その意味で宗教論争文も文学作品の優れたものといへるのだ。Duplik の真理愛表明の、あの彼の言葉は『一度美を見たものは、この世の営に適さぬ』と云う強烈な美意識の表明に外ならぬ。

詩人の社会への参加は一に、自己の言葉を厳密に普遍を期した厳密を求め続けることにつきる。

『諦念』と題したこの小論に僕自身の諦念が殆んどないのを自覚する。—この論旨が至極あいまいなものその為だ。がともかくもこれが僕の Lessing への助走だ。

僕はこの小文を次の Erziehung des Menschengeschlechts 91 で以て終り度い。

Geh deinen unmerklichen Schritt, ewige Vorsehung! Nur laß mich dieser Unmerklichkeit wegen an dir nicht verzweifeln. —Laß mich an dir nicht verzweifeln, wenn selbst deine Schritte mir scheinen sollten, zurück zu gehen! Es ist nicht wahr, daß die kürzeste Linie immer die gerade ist.

Text:

Lessing : Auswahl in drei Bänden.

—VEB Bibliographisches Institut.Leipzig.

G.E.Lessing : Gesammelte Werke in 10Bänden. Herausgegeben von Paul Rilla

—Aufbau—Verlag. Berlin.

主な参考書

W. Dilthey : Das Erlebnis und die Dichtung.

F. Gundorf : Shakespeare und der deutsche Geist

Th. Mann : Adel des Geistes.